

會報

第 5 號

— 目 次 —

I 全 般 的 研 究

1. 真珠業界当面の問題について 全国真珠養殖漁業協同組合長
堀 口 初 三 郎…1
2. 業界の現況と伊勢部会に望む 真珠振興会長 御 木 本 美 隆…3
3. 真珠研究会伊勢部会を参観して 元農中理事長 湯 河 元 威…8
4. 米国に於ける真珠流通過程と今後の見通し
富士真珠 小 賀 野 隆 治…12

II 会 員 研 究 発 表 (施術作業シリーズ第一回)

5. 「施術作業」シリーズの討議にあたって
国立真珠研究所長 高 山 活 夫…15
6. 中小珠の施術について 布施田地区代表
田 辺 時 生、田 畑 良…17

III 海洋観測委員会報

7. 海洋観測委員会注意報に就て 海洋観測委員会・国立真珠研究所…21
8. 海洋観測表及各海洋概況 三重県水産試験場・的矢湾養殖研究所…26

III 雑 報

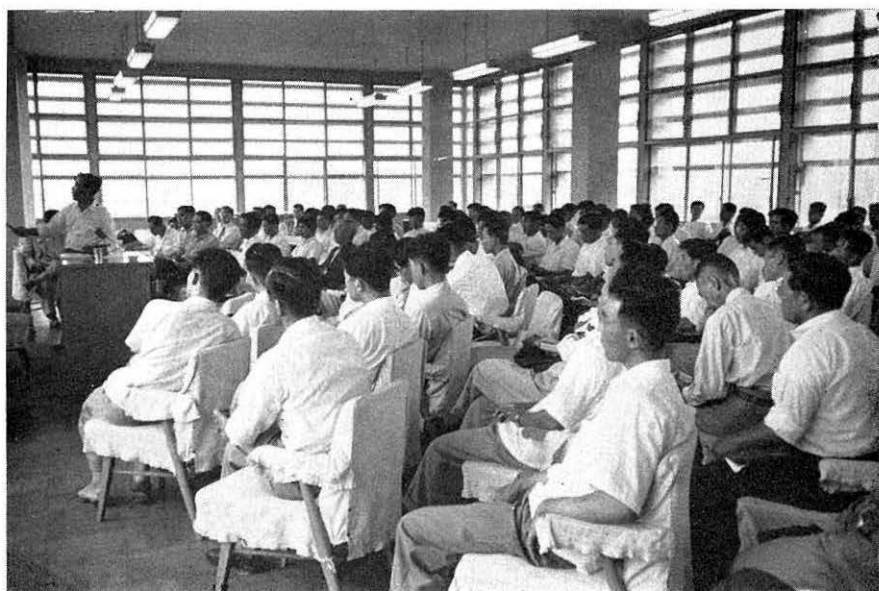
9. 伊豆三津浜の養殖場ルポ 富士真珠 横 瀬 寛 一…32
10. 伊 勢 部 会 点 描 ……………33

真珠研究会伊勢部会



写真上 第5回研究会に於ける御木本振興会長の講演（後方に湯川元農中理事長、堀口、山本各漁協幹部諸氏の顔も見える。）

写真下 第5回研究会に於て「施術シリーズ第1回」の討議をする会員。



一、真珠業界当面の問題について

全国真珠養殖漁業協同組合

組合長 堀口初三郎

本日は元農林中金理事長湯河元威氏、農林中金名古屋支所の安田次長殿、真珠振興会々々長御木本美隆氏、県水産課平賀技官殿の諸氏を迎えて真珠研究会伊勢部会を開きましたことは、業界として誠に意義深いことでありまして私達の尤も喜びと致す次第であります。

特に湯河先生にはお暑い折にもかゝらず遠い処をわざわざおいで下され、若い皆様が真珠の仕事と取組んで研究して居られることに非常な御関心を持たれ、今回は參觀の為にお越しくださったのであります。

先生には吾々業界は昭和二十八年よりいろいろ御配慮御指導を賜っておりますのでありまして、今全国真珠養殖漁業協同組合が実施している真珠共販制度も先生が生みの親でありまして、今日バラ珠が安定しているのも先生の御指導の賜でありまして我々業界は深く感謝の意を表する次第であります。

真珠業界も戦後昭和二十九年迄は順調でしたが生産面に於きましても資金、母介、其他資材の關係で年産三千貫以内でありましたが二十九年は生産が四千五百貫となつたに

も拘らず何らの販売の組織もなかつたため大暴落して入札会も一時取止めるという混乱状態に立至りました。それで吾々組合幹部は種々考究の結果、計画生産及び共販制度を確立して其資金を農林中金にお願い致したのであります。

当時農林中金の理事長であつた湯河先生に其の節いろいろ御指導を受けたのであります。その結果出来上りました共販制度によつて昭和三十年年度には集荷約二千五百貫で前渡金八割で十三億円の融資の枠を受けたのでありますが、遺憾乍ら其年には約千二百貫。六億より集荷出来なかつたのであります。それで農中へお詫びに参つたところ、湯河先生は何の組合でも、最初からうまくはゆかない、總會や役員会では賛成々々で何でも簡単に決まるがいざ実行ということになるとなかなかそううまくゆかないものである。日本のどの組合でもそうである。農業組合が現在の様にうまくいつているのは永い間かゝつての組織と訓練によつて現在が出来上つたのである。真珠組合も一年生であるから無理もないが然し二年生、三年生と年を追うごとに、進歩して行く様に努力せなければならぬ。いつまでも現状維持ではいけないと非常に激励されたことをよく憶えています。恰度組合も今年で共販制度実施三年目で三十一年には集荷二千貫十二億の集荷が出来ましたが然し一方には国内の金融引締め其他の狀件によつて現在二億余りの「ストック」があり、販売には相当苦勞をしましたが年内には全部

売れる見通しがついております。

組合と致しましても農中よりの御要望も有り組合員数、千余名、六千万円の出資金でありますが此れを年内に一億円に増資することになり、亦預金もこゝ二・三年のうちに二・三億円位いの資本を蓄積したい考へであります。先般も農中の一楽理事に和具に於いて講演をやつて頂きましたがもつと組合員に組合精神をよく體得させ金のつながりばかりでなく、精神的なつながりが大切だと云はれましたがその通りでありまして、今後組合員の組合精神に徹すると言ふ面への啓蒙運動も大切だと思ひます。

九月からは第三回目の集荷を始めるので目下、着々準備中でありますから皆様の御協力を御願致します。

養殖業者の生産する「バラ珠」は前に申し述べました如く現在やゝ安定しつゝありますが、輸出の段階にある「ネツクレス」がバラバラで何等組織がなく「バイヤー」に買いたゝかれてゐるのは吾々の最も遺憾とする所であります。

是非、加工業者も協力一致して「ネツクレス」の共販制度をつくられ「ネツクレス」の値段を安定さす事を是非一日も早く実現していただきたいと思ふのであります。

粒珠の共販と「ネツクレス」の共販はあたかも車の兩輪の如きものでありまして、現在の様に一方だけ廻つてゐたのでは安定したとは申されないのであります。

「ネツクレス」も御木本さんがつくろうが、堀口・村田がつくろうと、此れは十弗或は十五弗と値段を内地の業者が決め、バラバラ勝手に安売の競走をしないようにしたいと思ふのであります。それには加工組合に於て共販制を実施する事だと思ひます。そう云う制度が出来れば「バラ珠」の値段も「ネツクレス」の値段に引合う様に致したいと思つて居ります。只現況の様想では「バラ珠」の値段を引下げれば亦「ネツクレス」の値段が下り、どこ迄さげても「ネツクレス」が引合はないことになるのではないかと思ふのであります。若し業者が自主的に値段を維持する事ができない場合には法律的には専売にすると云ふ事が中央に於いて相論議されてゐるのであります。

専売にすると云ふ事は業者は余り賛成ではないのであります。日本より他に出来ない商品でありますから内地に於いて値段を決め、安定を計ると云う事が一番大切な事だと思ひます。

其れと同時に生産面に於ても計画生産を行ひ、其漁場の面積に依り、貝の飼育数を決め漁場が三重県のように飽和状態にならない様にする事が肝心でありまして、密殖のため貝が夏死滅し真珠層の分泌が悪く不良真珠の沢山生産される事は是非規正せなければならぬ事であると思ひます。

あご湾の現在の状態では、母介は大きくならず真珠層の

分泌も悪く、貝は夏死滅すると云う悪条件丈では業者は自滅の外ないのであります。

今回三重県下に於いて密殖を防止するため県条例において筏の登録制を実施したのでありますが、その他広島、愛媛等の他県に於いても三重県の「轍」をふまない方法が実施されつゝあるのであります。

この様に一方に於いて良質の真珠をつくる様努力すると同時に不良真珠は組合に於いて買取り、焼捨てて市場に出さない事が必要であります。亦輸出検査に於いても不良真珠の輸出を禁止してゐる次第であります。

良い真珠を毎年四千貫から五千貫程度安定した値段で輸出する様にせなければ永続性がないと思ひます。

「ダイヤモンド」は「ダイヤモンド」政策に依つて値段は安定してゐますが、やはり四・五ヶ国で生産する「ダイヤモンド」の鉱石を磨く（カット）ところに於て生産を計画して、英国の「シンジケート」の資本に依つて販売は統制されているのであります。日本の真珠も前に述べました如く是非自主的な統制により値段を安定したいと思ひます。

漁協の共販制度も是非九月より始め此後永く引続き実行したいと思ひますから御協力をお願い致します。そうして一日も早く「ネックレス」の共販制度の実現を切望してやまない次第であります。

最後に若い皆様に此の機会に特に御願ひして置きたい事

は皆様が生産は勿論、加工・輸出と各部門を真剣に検討されて、将来真珠業界はどうある可きか、どう指導すべきかと言ふことをよく研究され、理想を持つて一歩々々御本会長を中心に一致団結して業界の推進に当り此の仕事を安定さす様に一層の御努力を切望してやまない次第であります。

二、業界の現況と伊勢部会に望む

真珠振興会長 御木本美隆

御木本でございます。突然御指名いただきましたので皆様にお話申し上げる用意を致しておりませんが、先程から小賀野様のお話を伺い、又皆様の大変熱心な研究ぶりを拝見致しまして、私が関係しております振興会のこと、又業界全搬にわたることなど思いつくまゝに少しお話させていただきますと思います。

実は、私昨日神戸におりまして大月さん、大久保さん、鈴木さん、三人の業界の長老の方にお目にかゝりまして振興会として座談会を持つたわけであります。会談の目的は最近いろいろ業界の問題につき検討の時期に入つていといふ考へのもとにあつたらどうか、こうしたらどうかと云う御意見をいろいろ私の所へ云つて来られる方もありますし、このまゝではいけないから何とか新しい方策を樹て

ようではないかというような気運もあるように見受けま
す。しかし御承知のように戦後こゝまで真珠業界が発展し
て参りましたことは、御同慶に堪えないのでございます
が、この真珠業界が果して真珠が発明されて以来適切な手
を、各時代に應じてうつて来たかどうかという点になりま
すと甚だ疑問があるのじやないかと、実はそう言つた点に
ついて業界の最も根本的な事項についてお三方の御意見を
伺う機会を昨日得たのであります。三人の方にいろいろと
お話を伺うと、こういうことを云つていらつしやいます。

「今日の業界の発展は目ざましいものがあり、その意味に
於ては大変喜ぶべきことであるが、一步退いて冷静に現在
の状態を考え、今後の業界のことを考えると寒心に耐えな
いものがある。それは過去の真珠業界が歩んで来た道をこ
の戦後の真珠業界が、同じ問題をちがつた手段方法によつ
て解決することなく、たゞその日ぐらしをして居るんじや
ないか。極端に云えば明日のことを思わずたゞ今日よけれ
ばいゝんじやないかと云う考え丈で動いているような気が
して心配なのだ。」こういう御言葉が三人の方から出たの
であります。

業界のことゝ申しますと生産・加工・輸出と三つの段階に
関係することでございますから、輸出だけがどう、加工丈
がどう、生産丈がどうだ、と言うことではありませんが、
真珠業界全搬としまして、やはりこれが一種の独占企業の

時代から、既に競争時代の段階に入り、しかもこの競争時
代と、いう言葉が国内競争時代から国際的競争時代に、も
う入つてしまつているのだ、そういう段階を考えますと今
後の業界のあり方というものはたゞ漫然と昨日やつて来た
ことを今日くり返していれば明日も今日の様になるだろう
というような考えではいけないのじやないかというよう
な、御注意をいろいろな御批判もいたゞき、しからば「ど
ういうことが一番この業界の根本問題なのだろうか」と伺
いましたところ、大体皆様のお話はこういうことでありま
した。

先づ下から申し上げますと生産の問題。真珠は先程から
宝石であるとか、宝石でないとか、いう言葉がありました
がとに角これ丈の貴いものをつくることにおいてやはり
「真面目な気持で、いゝ物をつくる、という考えが失われ
てしまつてはいけない。」と言つて、この「量産の問題」で
ありますが、これが自由経済の自由のまゝの形で行くこと
が勿論のぞましいのであるが、それが世界経済の需要と見
合わない場合におこる真珠の特色から来る価格の変化の問
題が及ぼす影響というものは、甚大なものがあるから然も
この生産は長期的生産であるから計画生産という問題は、
これは本当に真剣に取り組まなければいけない問題であ
る。この問題を他所から解決してもらおうという考え方は
甘いし、そのようなことではこの業界はどこへ行つてしま

うのか分らない。

即ち生産業者の方達自らが反省して思いを練り、方策をたて、この実行を計つていかなければならないのである。過去に於ても昭和の初期に於ける不況時代とか、いろんな経験を豊富におつみのこの三人の方のお話を承りますと、過去に於ても、そういう時期に遭遇し、そういう問題を考えたこともあつたが、実際に効果の上るような施策が打てないまゝ今日に到つた。

しかし、今日の真珠業界はどうしてもそういう問題を考へて、解決しなければならぬ段階になつていと思うから、是非そういう点は考へて実行に移したい、というようなことでございました。

加工・輸出のことに關しましては、これが国際商品で自分は珠だけ作つていればいゝんだ、珠の作り方丈しか知らないから、あとは売る方の人自由にやつてもらう、成程日常の仕事はそういう面があるかもしれないが、この真珠というものが国際商品であつて九十七%という高い純度をもつて海外に輸出されているということを考えますといくらそう割り切つたように云い切つてみたところで、この商品の性質上それで済むわけでない。しかもこの国が今後益々世界の「日本」として立つて行くには輸出貿易が必要であるということは皆様も御承知の通りでありますからその一端をになうこの特殊の産業である真珠事業というものの

は、やはり作つた者から最終の消費者にわたるまでの段階に於てそれ丈国際的の視野の下に輸出・加工の問題を考へて行かなければならない。そうなりますとこゝに一番大事な問題は「価格安定の問題」と「品質監理の問題」であります。それで御承知のようにおそまきながらこの業界におきまして、この四月から品質監理を輸出組合で行つて、ある最低線を引いてそれ以下の品物は出さないというような決意を業界で固めて実行に入つたのでありますが、その程度のことではいかどうか、又この品質監理というもの最終段階の売る人々の手にのみ委ねておいて果して完全なものといふ得るかどうか、これを立場を変えて申し上げますと加工・輸出の業者の方々にしてみると、自分らの手に入つて来る珠が品質の悪いものであれば自分らとしても非常に事がさばきにくい、作る所から品質監理をしてもらつて、いゝ品を作るようにしてほしいというような希望もございましょう、また価格の問題でありますが、やはり何といふまでも、こういう特殊の商品は価格が安定しているといふことが、最終購売者でありますお客さん達の購売意欲をそゝり又中間業者である小売業者、海外の小売業者、輸出入業者、輸入業者の人達の購売意欲をそゝる大前提でありますからどうしてもこの価格安定という問題に取り組まなければならぬ。

そこで単に生産丈の問題の解決では駄目なので、この加

工の問題についてはもつと積極的に業界としての体勢を整へるなり、何なりの準備を考えてほしい。と言ふ様な御意見でありました。具體的のことは各業界のそれぞれの組合が実施機関でありますから今後行われて行くように私自身としても希望するのでありますが、振興会と致しましては御承知のように戦後三つの組合が出来まして、これが現在の活動に入っておりますが、この仕事はどうしても生産から輸出まで特殊産業としての自覚の下に全体が協調して歩調を合せて育つて行きませんか、本当の成果は上げ得ない事業であります。それでその全体のまとめ役を振興会という組織の下にしようということになりまして私も及ばずながらそのお世話をさせていたゞいてるのでありますが、今後其業界が個人個人の利益追究の段階を離れて、グループによりまして生産は生産のグループ、加工は加工のグループ、輸出は輸出のグループによつて、然もこの三つのグループが相協力して一つの態勢を整へることによつて初めてこの輸出産業としての真珠事業の発展の基礎が与へられる。と言ふ段階に入つて居ると思ひます。それで私は振興会と致しましては出来る丈さういふ国内的状態、或は世界的状態に對応し又この事業が發展する鍵を作ると言ふ意味で、いろいろと施策の面でも出来る丈のことをさしていたゞき度いところいふ風に思つて居るわけであります。

次に研究会のことであります。

去る七月二十二日神戸で研究会が開かれまして、神戸の方は御存じの通り輸出・加工の人が大部分で御座いました。約五・六十名集つて熱心に研究会をやつて居りました。東京に於きましても毎月数十名の方が集つて研究会をして居ります。

いろいろな事業も産業も御座いますが、業者の方が自発的に此の様な研究機関を設けて、自分が属して居る仕事の事は勿論、自分と間接的に關係のある上部機関に属する方達或は下部機構に属する方達の事を勉強し、業界全般に属する事について研究すると言ふことはあまりやつて居ないと思ひます。そう言ふ意味で三重の研究会が本日この様にこれ丈多数の皆様が出席して熱心に研究されることは、同慶に堪へない次第であります。

どうかこの研究会はこの業界全体をまとめる社団法人日本真珠振興会の下部組織として、即ち皆様一人一人がこの特殊産業を育てる機構の一員であると言ふことを自覚し、真珠産業発展の爲の研究会であると言ふ事をおぼへていたゞいて、生産の方が輸出・加工の事を聞き、輸出・加工の方が生産の事を聞かれると言ふ事は、大変有益な事であると思ひます。

それらを通じて将来この真珠事業の政策の基礎になる「考へ」と申しますか、「同じ気持」と申しますか、こう言

ふものが生れたら大変幸いだと思ふわけであります。

しかし研究会はあくまで研究会でありまして直接の施策の団体であつたり、政策の機関ではないのでありまして、その点はどうか中立的な立場と申しますか、公共的な立場と申しますか、こういう点は忘れないで自由に討議はしていただくがその線は守つて、間接的に事業の縁の下の方にもちになつていただきたい。こういうふうに私は希望する次第であります。

それから一・二先程小賀野様のお話の中や質問の中になりましたことについて私の所感を述べさせていたゞきたいと思うのでありますが。先づ真珠が宝石であるかどうかという問題。

この問題につきましては、東京の研究会に於てもずい分討議されました。たゞこの真珠が宝石であるか宝石でないかということはその問題を取扱う人の考え方、その問題を取扱う方の立場によつていづれとも言えることであります。たゞ私は（簡単に申し上げておきますが）我々業者が、即ち現実問題をたえずとらえている我々業者がたえず考えていることゝ世間一般が期待していることゝは違ふという点を指摘したいと思ひます。もし真珠を貴いものだ、少なくとも真珠が欲しいという気持ちで買つておる世界の人達が、おまえの持つておる真珠はそれはもう雑貨なのだとそんなものはつまらないのだというようなことになつてし

まつては私は大変だと思ひます。又消費者全部の方はそういう気持ちで買いになつてゐるのではないと思ひます。

真珠というものに對する「夢」が無くならない限り、真珠というものに對する「気持」が変らない限り、これはやはり貴いものという觀念が伴ふものだと思ひます。そこで、これをあつかう施策の面から申しますと「宝石としての産業」として持つていこうとするのか、或いは「雑貨としての産業」として育てゝいくのかということによつて施策の面では違つてくると思ひます。又商品自体から申しますと宝石であるか雑貨であるか値段も品質も多様になつており、或る部分は宝石に入り、或る部分は或は雑貨という線に入りましょう。しかし「真珠」というものを外で眺めますと、やはり「真珠」という一つの言葉にまとまるものであります。ですからこれをどういふところへ持つていこうとするのか。したいのか、という点で皆様が物を考えようとなさるのか、それとも現在こういうものだからこうなんだ安物が出てゐるから雑貨なんだ、ということだけで終つてしまふのか、これは皆様の心持次第、皆様のお考え次第。皆様というより我々全部の心がけ次第じやないかと思ひます。そういう点をちよつと申し上げて置きたいと思ひます。

それから先程小賀野様が私にベテランという言葉で海外宣伝のことをおつしやいましたが私自分でベテランと思つ

ておりませんがちよつと海外宣伝のことで気のついたことを申し上げます。これは私まだ申し上げなかつたと思ひますが前回アメリカへ参りまして、或る学校で招待されました真珠の話を致しました。そこで「皆様日本のことについて何を知っていますか、私は日本という国から来たのですが皆様は日本のことについて何を知っていますか」と学生に聞いたところが皆手を上げて、いろいろ云いました。つゞめますと三つ知つてました。一つは「マウントフジ」で

す。一つは「天皇陛下」そして三番目は「真珠」なのであります。私はそれを聞いて非常に嬉しかつたのです。やはり真珠というものを子供でも知つていくれたということ是非常にうれしかつたのですがそれでちよつと思ひつきまして発つ前にも武藤様にお目にかゝつてたものですから「絹」というものを知っていますかといふますと誰も知らないんです。日本は絹の国なのだが絹というものを知っていますかと云つたら誰も知らない。「ナイロン」とか「ダクロン」は知つているが、シルクというものは知らないと云うのです。それでその会合が終つてから学校の先生に聞いてみましたら学校では教えてない。教科書の中に陛下のことゝ、真珠のことゝ、富士山のことゝは出て来るけれどシルクのことゝは出て来ない。それで私帰つてから武藤さんにそう申し上げました処それは大変だ自分等は宣伝をやつていられるど二代目、三代目の子供がシルクを知らないのでは売れる

わけがない。それで重役を集めましていろんなことをおつしやつてたようですけど、それで私この「宣伝」ということは目につく広告とか、そういうこと丈が宣伝でない、もし本當にこれを産業として、世界の産業として日本がのし上げていこうと思うなら各国に對してもつと長期にわたる基礎的な宣伝が必要なんじゃないか。教育ということにも入らなければいけないということをしみじみその時考えた次第であります。

振興会も日が浅くまだ充分の手が打てゝおりませんが、いろいろ方策を見つけてまして皆様の御期待に副ふように海外宣伝のこともしたいと思つて居ります。

大変とりまとめない事を申し上げて恐縮でございますが、どうかこの三重研究会の支部も回を重ねるにつぎまして育つて、皆様が出て来る度にたゞ目先の何かいゝ物をつかむという丈でなく、皆様一人々々がこの国際商品、世界に類のない真珠事業を育てゝ行く一人だというお心持の上で集つていたゞきたいと思ひます。

三、真珠研究会伊勢部会を參觀して

元農中理事長 湯 河 元 威

何かお話をしろという事なのですが実は今日は何も話をしないでよいから聞きにくれればいゝのだという事であつた

ので、非常に当惑するわけなのです。しかしこれだけ皆さんが熱心にやつていらつしやることを拝見すると、私もついつりこまれてやらなければならないと思い出したのであります。

実は、真珠の問題が、これが出来た時からずいぶん御苦労が重ねられておりますが、終戦後ちよつと良い時もあつたようですが、今非常にいろいろ難極に立つていらつしやる様であります。これを此のまゝで「しようがないな」とお考えになる必要は毛頭ないと思います。私は真珠の事は皆目知らない人間ですが、たゞかつて金融機関にありまして、真珠の生産資金でありますとか、或は販売資金でありますとかいう事の御相談を受けていたのでございます。その時にいろいろの様子を見てみますと、他の産業、他のいろいろな経済的なお仕事と、およそ隔絶しているお仕事が皆様方のお仕事のような気がするのであります。これはやり方一つだというような感じがしたのであります。他の産業はいずれもいろいろ苦しい中をぬけて今日を築いたのであります。日本で立派になつた産業はそれぞれ血みどろの努力をして、今日を築きました、処が真珠業界の御様子を見ますのに先輩の皆様方は相当苦心もあつたでしょうけれども、他の部門とくらべますと、まだまだ御苦労が足りないと言ひますか、あまり御苦労にならなくても済んでいらしたというような御様子で、いつてみれば何もしてい

ないお仕事のような気がする。これは極言でお氣にさわるかもしれませんが私は常に御関係の方に申し上げているのであります、今日の真珠業界のこの姿は他所から拝見しておりますと、明治の始め、日本が国を開いた時の對外的な経済関係の問題、いつてみれば生糸、お茶の当時の取引関係が現在のこの業界の感想と似ていると思はれます。

このお茶と生糸をねらつて外国の商人が日本の港を開いてうまい汁をすおうとした時がありましたけれど同じような姿に皆さんは今日、この昭和の時代に於いてなつていらつしやるんだという感じが深いのであります。で生糸とお茶というものは、明治の始め国を開いてから今日までどういう経路をたどつたかと申しますと、生糸の方はそれこそ日本は昔から生糸をやつてたんですが、しかし外国に生糸を売り出してみると、外国の商人が横浜にきたり、神戸にきたりしてずいぶんひどいことをして日本の生糸を買いとゝいて、それを持つていつて、向うでアメリカの女のくつ下を作つていたわけです。そうすると非常にむづかしい注文が出る。けちをつけては買いたゝいて居つたのであります、そのつけられたけちをこの八・九〇年間かゝつて日本は化学的な技術をもつて、それを一つ一つ克服して来ました。今でこそデクロンとかナイロン・スフだとかいふものは機械的に出来ますが、あの機械をごらんになつてもお解りのように細い糸は小さなそろつた穴から出て精製な糸が

出来ず、処が生糸は蚕の口から出る、これを織つて編んで、あのフルフアツシヨンの靴下が出来る。あのきれいなくつ下が出来るということは容易ならぬ事なのです。まぢまぢなものが出るのがあたりまえで、あんなに機械で作つたようにサイズが同じに作られると言ふことを実現したのが、やはり日本の化学技術なのであります。生糸はアメリカのそういうクレーム等を克服して、ついに横浜の商館貿易を日本はこれをしめだしてしまつた。

そうしてアメリカにもつていつて日本の生糸の商權を確立したのであります。然しこれは戦前から人造絹糸或はスフと最近ではデクロンとかの化学せんいによつて倒されて来ている。これがこゝ十年か二十年の経過であつて、日本の生糸業というものは採用されなくなつたのであります。

さて一方お茶の方はどうかというと、これはお茶の關係者には氣の毒であるが、努力がたりない。明治の始めの現在とたいして日本のお茶の輸出に就ては變りはないのであります。今だに横浜なり静岡、清水に外商が来て、お茶をいゝ加減に持つていくという姿であります。「生糸とお茶」この二つがちやうど今日の真珠がこの憂目を見ているのであつて同じようなきめを明治の始めにあいながらお茶と生糸の二つの道はこんなに分かれてるのであります。そしてかつて生糸は日本の商權をアメリカで確立して、そし

て日本の円は生糸によつて購われているという段階にまで持つて行つたのであります。此の間にかくれて化学技術は基より蚕糸業を興こす蚕糸政策というものは、血みどろの努力が行われて、あの地位を築いたのであります。一方真珠業界は故御木本翁がこの御仕事を大きくなさつて以来順調に伸びてきていらつしやつて、特殊の地位を確立されました。これは生糸が八・九〇年かゝつて血みどろの努力をして確立したと同じものを天から援かつたように受けられました。そうした恵まれた真珠業界その後の發展に於て大した御苦労もなかつたのであるからしたがつていろいろの事について打つべき手もうつてないという事が思われます。いやそうではないとおつしやつても、そうならざるを得ない状態又はそんな事を考えなくてもよい御様子であつたのだらうと思われまふ。ところが戦争が始つて戦争に負けて、そして今までのアメリカやヨーロッパに確立した御木本パールといふますか、日本の養殖真珠のこの成果も商權も崩され、おしよせてくる外商が日本の国内を買いたゞくという姿がでてきて、一方漁業權改革等があつて従来のような、自らなる姿において維持された養殖真珠の適當なる生産規模というものを崩され、戦国時代のような今日の姿になつたのであるが、考えてみればこれは明治の始めに日本國民として、産業者として受けた経験がある。生糸についてはそれを我々先輩は乗り切つて来た。だから皆さんが今こ

こでへなへなになればお茶と同じ結果になるのであります。それではいけない。やつぱり生糸とおなじように最後にはデグロンと對決して破れるか破れないかという問題を持つ所までやつてのけるという事をどうしてもやらなければならぬ。生糸とお茶、それ等と真珠と、私は非常によく似ていると思います。そういう沿革といつてもよいと思ひます。だから生糸の施策に對しどうして生糸にどんな苦労がなされたかということは詳細にこれを検討し研究することが出来る、私は信じます。所でその蚕糸業界の姿をみておきますと、養蚕家というのは、この生産課程と製糸工場というのがあつてこれが加工しその他に問屋とか輸出とかいうのがある。この養蚕、製糸問屋、輸出がばらばらなのであります。いわゆる一貫メーカーがない。所が真珠には一貫メーカーがある。そしてこのことがやはり「物を考える」一つの端緒になると思ひます。一貫メーカーの中には生産者としての部分と加工業者としての部分と輸出業者としての部分があるわけです。所が蚕糸業には繭を作つて輸出する人が全然いない。そうすると養蚕家と製糸家とは相對立すべきもので、製糸家は若干輸出業を兼ねる者もおりますけれども、しかしそれは真珠業界からいうと、まればな部分ではないかと思うのです。この一貫した人がいるという事はその一貫した人は真珠業界全体の利害を、各段階の利害を身をもつて體驗している人であつて、そしてもし

もこゝにお集りの皆様方が主として生産の御担当であるならばそれと同じ基盤に立つていこうことであります。故にその一貫メーカーを分析してみればどこまでが生産業者としてなすべき分野でありどこまでが生産業者として獲得すべき利潤であるかという事も出てくるわけであります。どこを合理化すればいいかという事も一貫メーカーの立場からいへば出てくる、それと同じ事が真珠業界全体においても出てくるという事になります。そこで私は皆様方にお願ひしたいのですがとにかく「真実一路」という言葉があります。「真珠一路」に進んでもらいたい。これは日本の蚕糸業の關係において製糸家とか輸出商というものの中には生糸一路に生きてない人がいる。その人は生糸が駄目なら他に転業するという円滑さをもっている人、この人にもしも皆様方がほんとに「真珠一路」に生きて行くならば真珠業界の運命をその人に託する訳にはいけないということです。又真珠業界を食ひものにする様な他の人が現われてもいけない、それも排除すべきであります。だから生産を基盤にして真珠一路に進む人、この人が真珠業界をほんとうに、盛り立てゝ行く人であると思ひます。この人が生糸業界が過去何年間にあつた血みどろの努力と同じような努力をこれから重ねていつて日本の真珠業界を確立せねばいけない、私は思うので、一つ皆様方にやつていたゞきたいと思ひます。過去において貴重ないろいろの御經驗も

ある先輩の方々も大切です。いろいろの事をお教えをいただく事もあると思います、けれども前にいつたように、実は業界全体として眺めてみて、産業として眺めてみて、ほとんど何もしていないところ、こういう産業はめずらしいのです。しかも外貨手どり数の高い貿易として大切な、それがほとんど何もしていない。組織も最近やつと確立してきたとかいう話。金融もまるでなっていない。技術の方面もこれから。研究所もこの間出来たばかり。そうするとこれこそ若い諸君がこれからやつていくには何の故障もない。行きがよりが何もないということ。いきがよりが何もないと共に頼りになるものが何もない。こういう所こそ若い諸君が本気になつてやる、やりがいのある所だろうと私は思うのであります。今日もいろいろお話を伺つて居りまして、私は内容は解らないが非常に熱心な皆様の研究会の進め方に實際感激いたしました。具体的な内容につきましてはこれから先、技術の方は技術の専門家、化学者等の御援助も充分に受けなければならぬ。経済の方はこれまた経済の専門家なり経済学者なりの検討も充分に受けていかれる必要があると思ひます。とにかくやるねうちのある仕事なのです。だからやはり「真実一路」にいくように「真珠一路」に徹していく。二またかけているような人に業界の運命を託するような事は出来んと。これだけ一つ若い諸君は一生の仕事として真珠をやるといふつもり

で、どうかやつていただきたいと思ひます。勝手な事を申しましたが一言感じたまゝをお話ししました。

四、米国に於ける

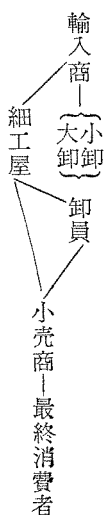
真珠流通過程と今後の見通し

富士真珠 小賀野隆治

伊勢地区の養殖業者の皆様と話が出来る事は非常に喜ばしい事である。これから話すことは滞米期間が短期間であつた為、全面的に正確とは云えないが何らか業界の為に参考になれば幸いである。米国の市場が我々養殖業者とどの様な関係にあるのか、又それに對して現在業界がどの様な立場にあるのかを話して見たいと思う。

米国に於ける真珠の取引はどの様に行われているか。最近の特徴或は将来どの様に市場が動いて行くのかと言う事を先ず考へて見たいと思う。

米国に於いて真珠が購入者に流れるルートは次の様な流通過程を経て居る。



我々が輸出した品物はこの様なルートを通つているのであるが、最近の傾向として細工屋の占める地位が目立つて

来ている特徴がある。この輸入業者は更に左の如く分類出来る。

輸入業者(商)

真珠專業者	— 真珠のみ専門にあつかう
寶石	— ダイヤモンド業者が副業にあつかう
雜貨	— オモチヤ・イミテイション
寶石小売商	— 相當に大きな業者が直接輸入する

この様に米国での輸入業者というのは非常に複雑である。そしてこれ等の業者を支へている者が最終消費者であり、大衆である。大衆が買はなければ真珠業者は存在しなくなる。

前記業者の取引方法は現金取引が非常に少く、従つて延取引(30・60・90日)をどの業者も行つてゐるこれは真珠業者だけでなく宝石業者の習慣である。依託販売、つまりメモランダムビジネスが普及している。この方法はネツクレス・バラ玉等をメモで借し売れた場合はこれを補充するのであるが、これでもわかる様に現金で売る場合は何らかの魅力がないと売れない。然しこの依託販売によつて近年養殖真珠の米国に於けるマーケットが拡大された事は疑いのない事実である。この反面輸入業者の資金の回転率が悪くなり多額の利潤がないと扱はない結果になつた。バイヤーに依る買いたゞきもこの様な利潤の追求のあまり、起きて来る問題であると思う。

ではどの様に商品が動くだろうか、日本の様に連を短時間に動かすことはむづかしい。少量づゝしか動かないので米国の業者も苦労していると思うが、一九五〇年—五三年は真珠の最良の年であつた。この結果新しい業者がふえ、競走激加のもととなつたのであるが、ニューヨークでは量でこなして、薄利多売の傾向が現出して居る。

次に米国の物品販売業というものはストックの調整に相當に氣をつかつてゐる。真珠商に於いてもそうであつて、自分達の売先に非常な注意を払つてゐる。従つてこれが少しでも売行がにぶると、ストックを調整する意味から云つて買ひびかえるといふ現状である。戦後五・六年間は買えば何でも売れたので、この調整も必要でなかつたが一九五五年以来、米国のバイヤーの態度が品物を選んで買う様になつて來たと云う事も前述のストックの調整の現れである。この事実を見て真珠が米国の消費者に一応充足したのではないかと考えても良いと思う。更に日本での生産が過剩になつた事も加へてこの傾向は益々強くなると思う。

では米国の市場が将来どうなるであらうかということについてであるが、現在抜ひ業者の増加によつて、利益率が低下している。更にストックの圧力も強いし、真珠の最良の年は過ぎたのではないだろうか。生産が六千貫も増加した今日米国の輸入量が減少した場合、相當な影響を受けると思う。今後の米国の真珠の動きに對して充分なる關心を

持たねばならない。

真珠の生産、価額の決定についても、もつと深く考えて見るべきであろうが、少くとも需要と供給のバランスによつて決定するのが根本原則と思う。現状は海外の市場が選択買の傾向となつてゐるにも拘らず、国内の生産は無計画に等しく年々増産されてゐる。米国の需要が今のまゝでは今後増加するという事はむづかしいのではないだろうかと考えられる。この様に国外での市場は相当に深重になつてゐるが生産面ではこれを規制するものは何もないので業者各々が自己の力以上に借入を行つてつくれば必ずもうかるという過去の経過のみ信じて、これが増産に拍車をかけて居る現状である。従つて限られた海面に於ける生産増加は、品質低下を来し、その相場をも低下させる事が必至である。生産量を減少させる事によつて四千円の七耗の上玉を一万円に売る事も可能である生産業者としてこの問題は何もつと考へて欲しいと思ふ。

生産の増大は漁場の荒廢であり更に母介の値段のつり上、更に海面使用權の獲得に對する非常な出費の結果、生産は増大するが、真珠の価格は下る。逆に生産のコストは上つてくるということにより、現在の状態で真珠を増産して行けば非常な反動が来るのじやないかと思ふ。特に現状のまゝ増産すれば真珠の宝石的性質が低下する。業界にとつて最も理想的な姿は毎年供給より生産が少しづつ足りな

いという形が望ましい。世界のマーケットの動向にとらみ合せて生産の指定、品質管理ならびに真珠のサイズの決定等が出来れば日本独自の輸出産業として更に發展の余地があると思ふ。現状のまゝで行けば、造花とかイミテーションパールのような日本經濟の最も悲惨な輸出産業となるのではないかと思ふ。

真珠を造花やイミテーションパールのレベルまで下げないように各自が真珠の政策を持ちそれを生産組合の組織の下に活かして行かなければならない。目先の利益を計るということは自分の足場を堀りくずすことになる。したがつて自分達の立つてゐる位置を絶えず反省し、どうすれば養殖真珠が安定した基礎の下に置けるのかということについて皆が胸の中に一つの真珠政策を持つことが大切であると思ふ。

◆小賀野氏に對する質疑応答要旨

〔問〕 米國に於ける輸入業者・卸業者・小売業者及最終消費者に至るマージンの比率は大体どのくらいか。

〔答〕 マージンの比率はその時によつて一率には言へないが大体、日本—^{FOB}6\$のネツクレスが最終消費者に渡る場合は大体二〇\$であつて、輸入業者三—五割、卸業者三割従つて小売業者は大体一〇割と言つた比率になる様である。

〔問〕 米國に於ては現在どの様なサイズを希望しているか

又それによつて吾々の生産も要求するサイズを作る様にしたらよいと思ふ。尚大珠の売れ行はどうか。

〔答〕 結局大珠を量産すれば養殖業者は損をすると思ふ、大珠の大量販売は考へられない。九耗の珠を大珠と言へば九耗の珠でデヨーカーを作つた場合大体一〇〇\$になる。これが最終消費者に渡る時は、大体三〇〇\$であるとするれば何如な米国民でも一般に売れることは無理である。六\$の連が売れると言ふことは月給五〇〇\$の人が六\$の連を買ふことは、日本人の二万円の月給の人が八〇〇円の連を買ふことと同じことになるからこれであれば買ひよいわけである。

五、「施術作業」シリーズの

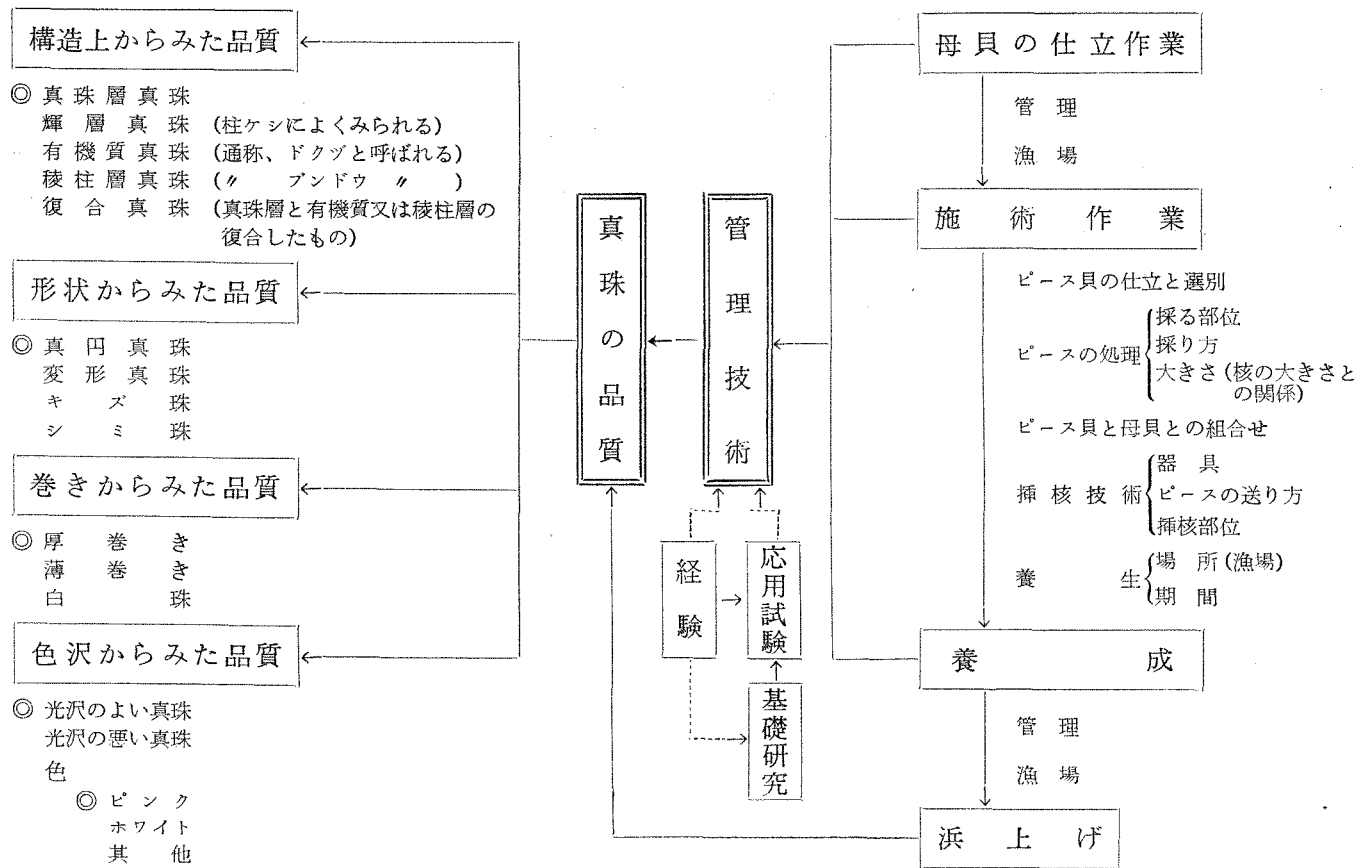
討議にあたつて

国立真珠研究所

高山 活夫

真珠養殖を行ふ場合に大切な事は合理的な管理技術を確立することである。真珠養殖の場合には他の産業（農業或は工業等）で云われる管理技術とは多少趣きを異にし各自が持つ漁場に相応した管理技術を確立する事であらうと考へられる。然し乍らその基盤となるものは共通のものでなければならぬ。その意味でこの研究会で各自の持つてゐる技術を公開し合い且つ吟味して共通の事点を見出す事が

必要となつてくるわけである。今回の議題である施術作業は真珠養殖技術上の重要部門である事は論を俟たないので今後会を重ねる度に活潑な意見の開陳される事を希望する。なほこの管理技術の問題であるが、この方法が体系化され確立されるためには、大学や研究所で各種の基礎的研究が行われその理論が応用化されやがて事業化される事が最も望ましい事であるが、基礎的研究と云ふものはどうしても或る一つの問題を深く掘り下げて行く事となり内容的には細分化されて行くものであり、又夫々の内容によつて研究の速度にも遅速が生ずる事は止むを得ない事である。従つて産業的の面から見ればその時点における各種の研究の現状を把握して技術の基盤としなければならぬわけで、この技術化自体が一つの大きな研究であり更に之等を有機的に結びつけた総合技術が管理技術となるわけである。この様な意味で研究者も實際を担当している各位もこの研究会で意見を出し合つて少くとも施術問題で管理技術確立のための資料の一端が見出されるならばその意義は極めて大きいものと云へる。擬て真珠の品質は、母貝の仕立てから施術作業を経て養成と云ふ過程を通じて決定されるものであるが、施術作業の如何が重要な要素である事は論を俟たない。なほ之等の關係を图示してみると次の様になるので今後個々の技術についての討論を経て最後に総合された討論を行つてみたいと思つてゐる。以後各位の論議を通じて夫々の事項については逐次解説を行いたい。



六、中小珠の施術について(第二回)

布施田地区代表

田 辺 時 生
田 畑 良

(まえがき) 中小珠の施術について布施田地区の田辺時生氏と田畑良氏とが共同講演を引受けられたが今回から引続いて行われるこの討議は真珠養殖上の重要な作業であるから二・三回に分けて行われる事と思ふ。講演の内容は飽く迄も体験を主体としたものであり、それだけに極めて貴重な意義を持つものである。その内容の中には必しも科学的に正しいと云へない面を含む場合もあらうし又批判の余地のあるものもあらうかと思われるがそれらの検討は最後に譲る事として本文は生のまゝを記載する事とした。各位におかれても充分吟味されて、色々と御意見を発表されん事を望むと共に、それによつてこそ始めてこの会の目的が達せられると云へる。以下の文章は田辺氏等の講演を取纏めたものである。

(国立真珠研究所長 高山活夫)

中小珠施術のうちピースの問題について左の事項について説明をする。

(A) ピース貝の仕立て

(B) ピース作製の技術

(A) ピース貝の仕立て

ピース貝の仕立てについては左の事柄について注意を払つて作業を行つて居る。

(1) ピース貝の選別

① 貝色(殻表面)による選別

最もよい貝は赤い放射状の模様のある所謂アサヒ貝であり、第二番目には後耳に赤い筋のある貝、次いで黒い放射状の模様のある貝である。不良の貝は殻面に放射状の模様がなない黄色貝及び朱色の貝であり、なほ一般的に白っぽい貝は使用しない。

② 貝の年令による選別

一般的に年令により左の様な特質がみられる。

二年貝。クリーム、金色系の玉が出る率が多いが、

巻きはよい。

三年貝。白色系の玉が多く出ると共に巻きも比較的

よい。

四年貝。白色系の玉が多く出るが巻きが遅い。

(2) ピース貝の養成

前年九・十月に前記に従つて選別を行い、中玉以上に使用する貝は一籠四〇〜五〇個、小玉以下に使用する貝は一籠五〇〜六〇個を収容し一般作業員と同様に良

い漁場に避寒する。

① 春先きに使用するビース貝

避寒より帰つてから貝掃除を行わづ手で雑物をとる程度とし（貝掃除を行ふと貝が弱る）、金網籠のみを取換へて五米層に吊下げる。この貝の使用期間は凡そ二〇〜二五日間である。その他のものは避寒より帰つてから貝掃除を行い二米層に吊下げ使用二五日前に五米層に吊下げを行ふ。

② 夏に使用するビース貝

よく選別を行い三〜五米層に吊下げておく。

一般に三〜五米層で養成すると、白色系の玉の出る率が多く、二米層で養成すると色のまばらな玉の出る率が多い様に思われる。なほビース貝としてはハサキのよく伸びた変形していない貝を使用する事が必要である。

(B) ビース作製技術

ビース貝は繁殖している漁場により夫々の特徴があるのでビースの作製法も夫々相違があると思われるが自分達が一応基準としている方法を述べる。

(1) ビースをとる方法

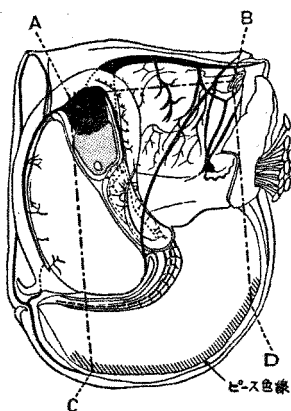
一般的にビースをとる方法としては次の二つが行われている。

① 鋏で外縁部をとり去り次いでビースの大きさに応じ

て鋏で内縁部から切りとり、その切片をビース板の上でメスでビースに作る方法。

② 外縁部をとりつに収足端の部分から外側を鋏で切りとつた後にビース板の上でメスで外縁部を切りとり、メスでビースに作る方法。

①②の方法を比較すると①の方法によるとビースはきれいに出来上がるが、見たところ色ツヤがよくない。出

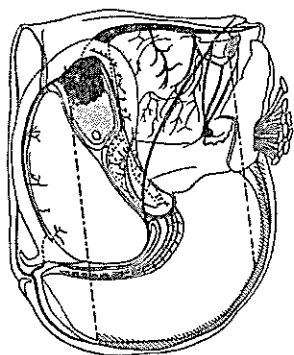


来る玉は白色系であり、キズも少いが光沢の点で劣る様に思われる。このことは二度の鋏使用でビースを弱らせる事と体液の滲出が多いためでないかと考へてゐる。従つて②の方法でビース色線を見て適當の大きさのビースを作るのがよい様に思われる。

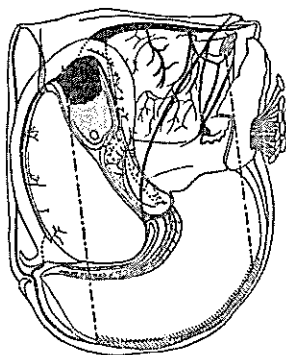
(2) ビースをとる位置（外套膜の部位）

心室（a）の頂端と口（b）とを結んだ線に對し、（a）

(中玉の場合)

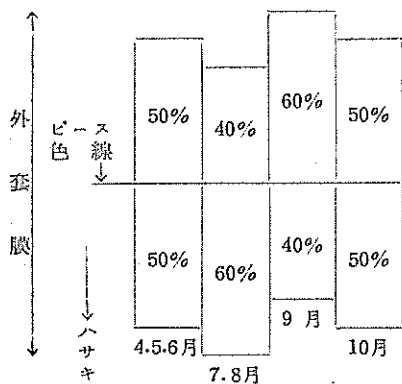


(大玉の場合)



(b) 夫々より直角に線を下してビース色線と交叉した
(c) (d) の間の部分を中心として適当に左右の部分を含めてビースをとる部分とする。
次に大玉、中玉、小玉の場合の外套膜をとる範囲は次の通りである。

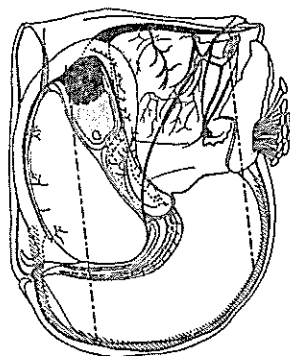
月 別	ビース色線の 外側	ビース色線の 内側
4. 5. 6	50 %	50 %
7. 8	60 %	40 %
9	40 %	60 %
10	50 %	50 %



(3)

ビースをとる部位の季節的変化。
ビース色線を中心として季節的に次の様な割合でとる。

(小玉の場合)



(4) ビースの大きさ(核の大きさとの関係)

使用時の細胞員の状態特にビースの厚さによりビースの大きさは多少異つてくるが大体次の標準により行つてゐる。

① 標準の大きさの算定

核の直径(D) × 係数(X) = ビースの一边の長さ(L)				実際に使用して いる ビースの一边の 長さの平均値	
今風	分			分	分
1.5 ~ 2.0	×	0.50	=	0.75 ~ 1.00 (2.25mm) (3.0mm)	2.5mm ~ 2.6mm
2.0 ~ 2.5	×	0.45	=	0.90 ~ 1.13 (2.7mm) (3.4mm)	2.7mm ~ 3.1mm
2.5 ~ 3.0	×	0.40	=	1.00 ~ 1.20 (3.0mm) (3.6mm)	3.1mm ~ 3.5mm

今迄の経験によると係数が0.2となると成績が悪く、0.3でも巻きの悪い結果を得て居る。

② 季節的に見た大きさ

①の標準によつて季節的に多少の調整を行つて居る。即ち夏を標準とすると春秋は多少小さくとる。

③ 一片の外装膜からとるビースの数

標準となる夏の場合には、大玉の場合(六~七ヶ切り)、中玉の場合(一ヶ切り) 小玉の場合(一四~二〇ヶ切り)、として居る。

④ 使用するビース貝の大きさ

使用するビース貝の大きさは、今迄に述べた通り核に合つたビースの大きさ(季節別にみたビース色線を中心とした割合) 使用時のビースの厚さ等を考慮に入れて挿入する核が大きい程大きなビース貝を使用する。大体の標準として一例をあげれば次の通りである。

小厘玉の場合	一四〇~一四五掛
中玉	一三〇掛
大玉	一一〇~一二〇掛

◎結び、

以上で大略ビース貝の選別から仕立て及びビース作製技術の要点を述べたが、真珠の品質を決定するものは母貝の仕立て、施術作業及び養成(漁場関係を含む)と云ふ一連の作業により左右されるものであるが、今回討議の對照となつてゐる施術作業も亦重大な影響を及ぼすものである事は当然である。今回の内容を要約すると次の様に云へる。

(一) 一般にビース貝が衰弱していると、光沢、巻きの点で劣るし又ビースが薄くて挿入した時折れる事がありキズ玉の出来る一つの原因ともなるから健康なビース貝の養成と使用前における調整とが必要である。

(二) ビースをとる部位の如何は真珠の品質(真珠層真珠とか稜柱質真珠―ブンドウ玉の如き種類及び巻き並びに色沢)に影響を及ぼす様に思われる。一般にビース色線の中

心としてピースをとる事は常識的になつてゐるが、全一部位でも季節的に分泌機能に変化があらうから、季節的に色線の内側と外側との割合を變へてとる事が必要となつてくるものと思われる。

㊦ ピースの大きさの如何は、ピースの厚さと関係があるけれども、要は核と密着する可能性の多い事が第一に必要なことで従つてある程度の大きさが技術的にみて必要となつてくる。又ピースの大きさは真珠袋の出来上る速さとも関係があると思われる。之等の点から考へてピースの大きさは巻きや形状（キズ玉等）に關係を生づると考へられる。

なほ今回の話して足りない点も多々あるので次回で充分補いたいと思つてゐる。（未完）

●講演者より各位に對して次の点の質問が出ておりますので御意見の發表をお願いいたします。

㊦ 既生貝（珠の入つてゐる作業貝）をピースとして使用した場合の成績について。

㊦ 若いピース貝（場合によつては稚貝）を使用した場合の成績について。

㊦ 細胞貝を五、六米以深で養成して使用した場合の成績について。

●質疑応答中他地区より出た意見は次の通りである。

㊦ 貝色と真珠の色について

（佐藤真珠、阿山氏）昨年浅吊りと深吊りによる真珠品質（特に色）の差を光線によるものと考へて実験室で光線を遮断して貝を養殖すると、出てくる玉は白色系統のものが多くなるが、貝色については浅吊りの場合には色が単調になる。

（礫 中村氏）黄色の貝をピース貝として使用してみたが普通の場合と特に變つた点は認められなかつた。

㊦ ピースをとる部位について

（間崎 山清真珠）ピースをとる部位としてはハサキに近い方を多くとつて巻きを早くする。次いで漁場によつて玉の色を調節する様にしてゐる。

㊦ ピースをとる部位の季節的變化について

（五ヶ所 幸田氏）季節にかゝわらずピース色線を中心として五分五分にとつてゐる。但し大玉の場合には多少内側の方を多くとる様にしてゐる。

（礫 中村氏）季節にかゝわらずピース色線より内側を多くとる様にしてゐる。外側を多くとるとクリーム、金色系の珠が多くなる。

七、海洋観測委員会注意報について

◎海洋観測委員会は七月中旬よりの水温急上昇に鑑み別紙の通り七月二十一日第一報、八月三日第二報を各会員に

發し、夏期斃死に注意を行つた。これは各新聞の三重版に掲載され又ラジオのニュースによつても報ぜられたが、將來この様な注意報はその都度なるべく速かに全養殖業者に渡る様に各報導機關も協力をして下さるはずでありますから御注意して下さい。

海洋觀測委員會 第一報 (七月二十一日)

眞珠研究会伊勢部会

◎現況と注意事項

特に注意を要する英虞灣の狀況について第一報を発表する。

英虞灣内の水温は七月十四、五日頃より急激に上昇を始め、湾奥部海域では部分的に七月二十一日表面水温は三〇度を突破し五米層で二七度を示したが、この狀況は昨年の同期より稍々昇温の速度が早い様である。今後天候の恢復と共に気温も上昇するであろうから湾奥部海域では急激な水温の上昇が予想され且つ深部迄に及ぶ事が予想されるが、急激な水温の上昇後に斃死が起る可能性が多いから施術作業並に施術済員の取扱ひについては次の点に注意しなければならない。

1 施術作業場附近の水温は特に上昇する危険があるから施術計画及び施術後の貝の養生場所は極力水温の低

い場所を選ぶ様にすること。

2 作業済み貝については、漁場水温をよく觀測して沖合の潮流の流れのよい低温層を利用する様につとめる事。

但しこの場合、深層部を利用する場合には深層部は酸素不足の漁場が応々あるから先づ試験的に貝を垂下し斃死の起らない事を確認してから深層部利用の途を講ずる様にすること。

比重については特に前年に比べて問題にする程の差異は認められない。

尚紀州方面は今のところそれ程問題にする現象は認められない。

尚部分的斃死が現れて居る漁場もある故、各漁場に於て異狀を認めたる場合は、速かに国立眞珠研究所に連絡して下されば直ちに研究所より漁場調査に参ります。

海洋觀測委員會 第二報 (八月三日)

眞珠研究会

眞珠研究所

◎夏季斃死に對する注意

現在のところ水温の上昇は表層から一米層において著しく、三米層以深特に五米以深は昨年、一昨年より遙かに

低温であることが目立つており一旬以上の遅れを示している。

三十一日現在で（多徳島南側）〇米—一米三〇度—二九度台、二米二七度台、三米—四米二六度台、五米二三度台、八米二一度台で、二米より以浅は警戒を要し、三米以深は安全層であるが今後晴天が続けば急速に深層も昇温してくるであろうから注意を要する。唯だ現在のところ五米以深は昨年、一昨年に比べて昇温が非常に遅れているから深層利用により斃死率を減少せしめ得る公算は大きい。

尚鴻奥部（賢島北側、鵜方浦入口）では三一日、〇米三一、六度、一米二九、八度二米二七、九度、三米二六、六度、四米二五、〇度で多徳島南側よりは一程度程度高温で大体三米以深が安全層と思われる。然し前にも述べたように今後深層も昇温して行くであろうから注意をしなければならぬ。

（注意すべき事項）

（一）真珠貝は体成分の上からみて最も衰弱した時期にあるから施術作業、特に年令の多い貝（老貝）や大珠作業には注意を要する。

（二）前報でもお知らせした通り深層利用の場合には海低に近い層では真珠貝が斃死することがあるから、海低に近い深さまで深づりをする場合には予め試験的に貝

を垂下して一—二日間様子をみてから本格的の作業に移る様にする。この点は鴻奥で浅い漁場で養殖をしている業者は特に注意しなければならない。（最近船越の一部でこの様な事例があつた。）

（三）三一日に入ってから急に深層の水温が低下を始め、比重も高くなつて来ているが、これは外洋水が底層に沿つて湾内へ流入してきているものと思われるが、貧栄養の外洋水の流入が強いと衰弱している貝は一層衰弱の度合いが甚しくなるから、深づりをする場合も表面から各層の水温比重をよく測定して表面より或る深さの危険な水層を避けた程度の深づりとする事を予め心懸け処置される事が必要である。

注意報について会員の皆様に御願ひ

今後降雨、台風等による海洋の変化、又は其の他による海洋の変化が多く現れて来ることと思ひますので特別に変つた事がありましたなれば速かに研究会に電話連絡して下さい。一般に注意を要する事項に関しては新聞、ラジオを通じて通報致します。

1957年7月24日施行

三重県水産試験場

7	8	9	10	11	12	13	14
四ッ島	布施田	片田	立神	神明	鶴方	多徳	奥神明
11.20	11.35	11.50	12.22	14.55	14.37	15.03	—
26.8	26.9	27.8	27.5	28.2	29.0	27.4	29.0
26.2	26.3	27.2	27.4	26.6	27.0	26.3	29.0
24.6	25.0	25.1	25.9	25.3	25.8	24.7	25.6
21.7	21.8	22.9	25.8	23.3	22.8	21.5	—
15.54	15.61	14.72	12.19	12.54	6.51	12.68	9.45
16.13	16.50	16.21	16.30	16.59	16.10	16.31	16.77
17.42	17.64	17.86	18.00	17.73	17.40	17.28	18.01
18.81	18.71	18.50	18.42	18.33	17.16	18.68	—
	5.02	4.95	5.05	5.02	5.43	5.29	
	5.52	5.15	4.91	4.93	4.72	5.57	
	5.43	4.90	5.01	5.20	4.63	5.69	
	2.44	2.59	4.81	3.65	4.49	3.63	
	101.0	104.0	99.4	99.4	102.5	102.9	
	110.4	104.0	99.8	100.2	95.4	111.4	
	108.0	98.0	102.0	104.0	93.5	113.7	
	46.9	50.4	98.4	71.0	85.9	69.4	
		8.0	7.95	8.0	7.8	8.0	
		8.05	8.0	8.1	8.05	8.1	
		8.0	8.0	8.05	8.0	8.2	
		7.9	8.0	7.95	8.0	8.0	
234.5	101.2	18.9	1.3	29.0	7.5	246.4	19.4
16.5	19.3	11.0	6.0	10.5	10.0	22.5	5.5
7	7	7	7	7	泥濁	8	泥濁
6.5	6.0	5.5	5.1	4.9	0.7	5.0	1.5
1-0	2-0	1-0	1-0	1-0	1-0	1-0	1-0
23.4	29.0	27.7	26.8	28.2	28.2	28.8	29.4
SE-2	SE-2	E-1	SE-1	W-1	W-1	SW-1	W-1
7	7	8	8	4	4	4	5
B C	B C	R	C	B C	B C	B C	B C

英 虞 湾 観 測 表

地 点		1	2	3	4	5	6
地 名		浜 島	迫 子	矢 取	湾 口	越 賀	間 崎
時 刻		9.20	9.45	10.13	10.30	10.45	11.00
水 温 C°	0m	26.2	26.0	26.1	26.0	26.1	26.2
	2m	26.0	25.9	25.9	24.8	25.1	25.3
	5m	25.1	24.7	25.0	23.8	24.6	24.6
	底	23.0	21.1	24.1	21.5	20.7	21.3
塩 素 量 CL%°	0m	14.88	15.10	15.14	15.16	15.60	16.14
	2m	16.47	17.05	16.24	16.46	16.41	16.37
	5m	17.83	17.97	17.69	16.93	16.93	17.27
	底	18.60	18.57	18.26	18.76	18.76	18.73
酸 素 量	溶 存 量 cc/L	0m	4.86	5.23		5.14	5.36
		2m	4.84	5.96		5.81	5.58
		5m	4.21	5.34		5.15	5.51
		底	1.82	0.37		5.20	3.95
	飽 和 度 %	0m	95.5	102.8		101.0	106.6
		2m	96.8	119.9		114.1	109.6
		5m	84.2	106.8		102.7	109.5
		底	34.3	7.0		84.4	74.2
P. H	0m	8.0	8.1		8.1		8.1
	2m	8.1	8.1		8.2		8.2
	5m	8.6	8.05		8.1		8.2
	底	7.8	7.8		8.0		7.95
プランクトン 沈澱量 cc		169.8	105.6	232.3	256.1	254.3	238.9
水 深 _m		10.0	14.4	7.5	17.5	28.0	21.5
水 色		7	7	7	7	7	6
透 明 度 _m		3.8	7.6	5.5	5.4	5.8	6.1
波 浪 ウネリ		1-0	1-0	1-0	1-1	1-0	1-0
気 温 _{C°}		29.2	29.8	29.2	29.8	30.0	29.8
風 向 力		NW-1	NE-1	0-0	SE-1	SE-1	SE-1
雲 量		7	6	6	6	5	7
天 氣		B C	B C	B C	B C	B C	B C

1957年7月26日施行

三重県水産試験場

104	105	106	107
内 瀬	船 越	五ヶ所	神 原
10.35	10.53	11.09	12.10
25.2	25.6	25.7	26.4
25.6	25.4	25.6	26.1
24.8	24.7	24.9	25.0
21.5	21.5	21.8	21.3
15.22	14.81	15.48	13.07
16.48	16.42	16.54	15.37
16.84	16.93	16.90	16.76
18.31	18.41	18.40	18.46
271.5	223.5	187.4	84.5
16.0	18.4	17.2	14.0
6	6	6	6
7.0	6.5	6.5	7.0
1-1	2-1	2-0	1-0
29.2	28.9	29.6	28.0
S-1	S-2	SW-2	S-1
8	9	9	10
C	C	C	C

八、海洋観測表及各海洋概況

◎ 英虞湾概況

三重県水産試験場

水温は昨年同期に比較して2.3℃低く上、下戸にもかなりの変化を示して最高水温は湾奥部の表面水で28.0℃最低水温は湾口部の最深部で20.7℃となつて居るが観測時以降は天候の回復と共に急激なる上昇を示し弁天漁場に於いては例年並に復して居る。塩素量は降雨の影響があり湾内全

般に表面から2m戸にかけ低下の状態にあつたが梅雨開けと共に漸次回復するものと思われる。

酸素量は前回同様で低戸部に部分的に無酸素状態に近いところがあるが5m戸以浅は飽和状態を示している。Plankton沈澱量は湾口部から間崎にかけて著しく増加し湾奥部は僅少である。主体は珪藻類、Chaetoceras属の中にnitysc ha Seriataが共存している。

水素イオン濃度は前回観測の浜島、迫子の低戸部が低くなつて居たが今回は全般に僅かな低下を示して居る。

五ヶ所湾観測表

◎五ヶ所湾概況

水温は英虞湾同様低目で最高水温は神原の26.4℃最低水温は宿の20.1℃となっている。塩素量も低目であるが除々に回復しているものと思われる。Planktonの沈澱量及主成分についても英虞湾と同様な状態にある。

地 点		101	102	103
地 名		湾 口	宿	迫 間
時 刻		9.32	9.51	10.19
水 温 C°	0 m	25.2	25.3	24.9
	2 m	24.7	25.1	25.2
	5 m	24.6	23.6	24.7
	底	20.7	20.1	21.0
塩 素 量 CL%°	0 m	16.06	15.78	14.40
	2 m	16.93	16.18	16.25
	5 m	16.73	17.15	16.76
	底	18.67	18.75	18.56
プ ラ ン ク ト ン 沈 澱 量 cc		176.4	209.9	287.3
水 深 m		20. <	20. <	18.5
水 色		6	6	6
透 明 度 m		7.0	6.5	6.5
波 浪 ウ ネ リ		1-1	1-1	1-0
気 温 C°		28.0	29.9	29.8
風 向 力		SW-1	SW-1	SW-1
雲 量		8	8	8
天 気		C	C	C

酸 素 量 CC/L

月 日		5月23日	28日	6月2日	10日	15日	20日	25日	30日
水深	0m	酸素量 5.90	6.15	6.40	5.79	5.57	5.98	5.41	5.68
		飽和度 101.9%	107.2	114.8	99.8	103.9	113.1	102.0	92.5
0.5	酸素量	5.83	6.06	6.35	5.85	5.56	5.87	5.25	5.26
	飽和度	100.4	105.8	114.1	160.9	103.3	112.2	98.7	87.1
1	酸素量	5.83	6.19	6.17	5.74	5.46	5.70	5.19	5.10
	飽和度	100.2	107.9	110.9	99.9	101.1	108.8	97.9	87.5
2	酸素量	6.19	6.19	6.06	5.01	5.39	5.48	5.11	5.06
	飽和度	109.0	108.2	109.8	90.4	97.5	104.1	95.1	75.9
5	酸素量	6.41	6.09	6.06	4.84	5.30	5.41	46.4	5.25
	飽和度	111.2	107.1	109.3	86.7	95.8	102.0	87.6	80.2
8	酸素量	5.90	5.86	5.68	4.59	5.11	5.29	4.54	5.12
	飽和度	101.9	102.8	102.0	83.0	91.6	99.2	84.5	78.3

◎的矢湾海況概要 (四月↓六月)

水 温

例年になく低目に経過した今冬期の水温の影響が四月の初めまで及び四月のはじめの水温10°C~11°Cと例年の同期より2~3°Cも低かつた。しかし四月上旬の好天候の連続と気温の上昇により六、七月上旬には各戸とも例年なみで高後平年並みとなつた。四月下旬には各戸とも例年なみで高低まちまちとなつた。五月、六月上旬と水温の上昇は例年なみで特に三十一年度の同期と傾向がにている。六月下期は例年では即ち梅雨期に入つており水温が一時低くなるが本年は梅雨に入るのがおくれ、六月中旬に夏型の天候の日があつたために湾内水温も一時上昇し、したがつて下半期の平均水温も例年に比し各戸とも高目になつた。しかし二十五日~二十六日頃より本格的な梅雨に入つたため再び水温は低下した。

冬期の海洋状態より夏期の海洋状態にうつる春期の水温逆転期 (Spring overturn) は四月上旬にあらわれて例年とはゞ同時期であつた。

比 重

湾内比重は全く降水量に左右されており、したがつて冬期が終り春期に入ると降雨日数も多くなるため、湾内比重、特に上戸水は低下する。表戸水の比重の低下と水温の上昇

的 矢 湾 観 測 表

昭和32年6月 的矢湾養蠔研究所

月 日	水 温 C°						比 重 S 1 5						透 明 度 m	雨 量 mm	プ ラ ン ク ト ン 量 5l Net
	0m	0.5	1	2	5	8	0r	0.5	1	2	5	8			
6月1日	20.4	20.1	19.5	18.8	18.5	18.4	19.02	19.34	21.02	23.55	23.99	24.29		+	
2	20.7	20.7	19.8	18.8	18.4	18.2	19.78	19.86	21.93	24.76	25.25	25.20	5.0		
3	19.4	19.4	19.2	18.9	18.6	18.5	23.27	23.33	23.33	24.35	24.40	24.10	5.1	0.5	0-1
4	20.2	20.2	19.4	19.2	18.6	18.5	22.65	22.35	22.87	23.99	24.50	24.37			
5	20.5	20.3	20.2	19.7	19.2	18.9	21.91	22.43	23.04	24.05	24.39	24.37	6.5	+	
6														18.5	
7														11.5	
8	18.3	18.4	18.8	18.7	18.4	18.2	10.82	12.35	20.86	22.67	22.88	23.30	2.5	+	0-2 1.4
9	19.4	19.2	19.1	18.8	18.5	18.5	13.57	13.57	20.56	22.02	23.61	23.94	3.6		
10	20.0	20.0	19.7	19.2	18.5	18.4	16.13	16.31	17.90	23.58	24.65	24.97			
11	20.4	20.6	20.4	19.9	19.4	19.0	17.11	18.02	21.06	23.15	23.69	24.64	5.0	1.0	0-3 1.3
12	20.2	20.2	20.0	19.9	19.6	19.4	19.96	20.31	21.87	22.99	23.26	23.80	6.5	3.5	
13														+	
14															
15	22.2	22.2	22.1	22.0	21.9	21.6	21.48	21.09	21.51	24.22	24.80	24.77	5.1		0-7 1.5
16															
17															
18	21.8	21.8	21.5	21.1	20.7	20.4	22.84	22.82	23.19	23.75	24.28	24.42	5.8	25.0	0-2 1.6
19	23.0	22.7	21.9	21.2	20.6	20.4	19.76	20.32	22.83	23.71	24.02	23.99	5.4		
20	23.4	23.0	22.4	21.0	20.1	19.8	19.38	20.19	22.14	24.35	25.14	25.06	5.8		
21	24.2	23.6	22.7	22.3	21.1	21.2	19.74	21.04	23.23	23.53	23.94	34.11	7.3	+	0-7 2.1
22	23.0	23.0	22.3	22.0	21.4	20.7	20.72	21.31	23.49	23.70	24.11	24.52	8.0	3.5	
23														4.0	
24														+	
25	23.1	23.0	22.8	22.4	21.3	20.3	20.95	20.75	21.69	22.66	24.58	24.93	4.8		0.5 3.1
26	23.0	22.9	22.7	22.1	21.0	20.7	21.19	21.51	22.01	23.86	24.76	24.87	5.2	1.0	
27														82.5	
28	22.9	22.8	22.6	21.8	21.1	20.8	10.33	11.19	15.24	22.22	24.33	24.57	1.0	19.5	
29														18.0	
30	21.1	21.4	21.6	21.7	21.0	5.97	10.14	12.39	20.75	23.30	24.05	2.9			

比 重 S ₁₅											
0m		0.5m		1m		2m		5m		8m	
$\bar{S}$	32	$\bar{S}$	32	$\bar{S}$	32	$\bar{S}$	32	$\bar{S}$	32	$\bar{S}$	32
22.98	24.34	23.33	24.09	23.64	24.48	23.76	24.54	24.55	24.87	24.73	24.83
21.94	24.85	22.63	24.99	23.26	24.95	23.94	24.97	24.24	25.11	24.69	25.17
21.28	25.25	21.84	25.36	22.65	25.39	23.27	25.44	24.10	25.47	24.50	25.51
20.92	20.94	21.65	21.34	22.35	23.89	23.11	24.44	23.90	24.72	24.31	24.86
18.39	21.02	20.10	20.95	21.54	22.08	22.79	23.04	23.67	23.56	23.71	24.03
19.59	20.82	20.78	20.83	22.16	21.63	23.05	22.99	23.67	23.76	24.06	23.98
17.42	18.70	18.98	19.00	20.52	21.45	22.34	23.58	23.46	24.12	23.97	24.34
14.03	17.88	15.79	18.81	18.29	20.69	20.58	23.17	22.57	24.28	23.01	24.01

T、Sは過去10年間の平均、32は昭和32年度分。

のために全く成尸をなす海洋状態となるのもこの時期である。例年は六月初、中旬に梅雨期に入るが、本年はおくれ本格的な梅雨に入つたのは六月二十五日頃であつた。このために六月中の比重は例年に比し高目に経過した。

酸素量

五月二十三日に測定を開始し五日間隔程度で測定を行つた。各戸とも酸素含有量は多く飽和度一〇〇%内外であつたが、降雨後の透明度が低く著るしく成尸をなした時（六月十日、二十五日）などでは下戸の酸素含有量は幾分低目（飽和度八〇%程度）となつた。

プランクトン量

例年ではこの期間は比較的プランクトン量の少ない時期であり時々 *Skeletonema* の増殖をみる程度であつた。しかし本年は五月上旬より *Chaetoceros* の大規模な増殖がみられた。即ち五月十日頃より増殖が開始され最盛期の五月十九日の観測では5L海水中の沈澱量8.6cc/Net採集沈澱量93.0cc、二十三日5L、5.7cc/Net、122.0ccと非常に大きな増殖であつて五月末期におとろへ消滅した。

最盛期の五月十九日の5L中の細胞数九二六、〇〇〇個でそのうち *Diatom* は九九、五%を示めている。特に *Chaetoceros* 属は八六%を示めていた。出現した主な種名は *Chaetoceros affinis*, *Ch. curvisetus*, *Ch. debilis*, *Ch. distans*, *Ch. I. orezianus*, *Eucampia Zoodiacus*, *Nitzschia seriata*, *Rhizo*

各月上、下半期 水温、比重平均値

区 分 月		水 温 °C											
		0m		0.5m		1m		2m		5m		8m	
		T	32	T	32	T	32	T	32	T	32	T	32
3	上	10.24	8.06	10.33	8.11	10.47	8.18	10.75	8.26	11.08	8.40	11.26	8.48
	下	11.92	10.20	11.95	10.20	12.06	10.19	12.35	10.20	12.34	10.27	12.53	10.31
4	上	13.89	13.12	13.87	13.08	13.89	13.03	13.82	12.99	13.74	12.85	13.78	12.83
	下	15.50	16.22	15.53	16.12	15.46	15.95	15.34	15.72	15.19	15.28	15.15	15.12
5	上	17.66	16.43	17.46	16.39	17.28	16.18	16.86	16.03	16.62	15.84	16.43	15.76
	下	19.55	18.66	19.43	18.61	19.17	18.42	18.89	17.99	18.52	17.44	18.23	17.11
6	上	20.99	20.15	20.58	20.12	20.45	19.81	20.00	19.26	19.51	18.85	18.98	18.65
	下	22.41	22.83	22.21	22.69	21.91	22.28	21.54	21.73	20.85	21.03	20.39	20.59

註 上、下は各月上半月（1日—15日）、下半月（16日—31日）

solenia imbicata, *Thalassiothrix Frauentheidii* 等であつた。その他四月中旬より東風により湾外より *Noctiluca* が流入し入江、汀部に赤潮状態になることがしばしば見うけられた。

其の他

的矢附近ではカキスパットの附着は六月二十日より始まり第一回のピークは六月二十七日に現われた。本年は蠣の採苗成績良好と思われる。

備考

観測点 的矢湾的矢部落前

水深 8m

観測時間 午前九時—十時

観測戸 0m 0.5m 1m 2m 5m 8m

プランクトン量 5L 2m戸海水5L中の二十四時間後の

プランクトン沈澱量

Net プランクトンネット 8m→0m

垂直採集一回の二十四時間後のプ

ランクトン沈澱量

(Plankton net r = 18cm Net No.

XX13)

その他 透明度、酸素量(サニメンター法)、降雨量

九、伊豆三津浜の養殖場ルポ

富士真珠 横瀬 寛 一

伊豆三津浜に於て昨年より真珠養殖を始めて居る。業者は四、五軒、一番大きな処で手持母介三十万貫位い。志摩より技術員が採用されて核入作業を行つていた。

黒潮の影響を受けるので冬期の最低水温も十度を下らないと言ふことである。が六月上旬より「フジツボ」の附着が甚だしく、七月上旬私が見た処では、それによつて母貝の發育は、ソ害されている様に見受けられた。河川は富士川、狩野川の影響が相当に強いと思はれ、比重・水温等も志摩地方と大差ないのではなからうか。

三津浜は観光地として一般に知られているが水族館と並んで、鳥羽の「パールアイランド」を小さくした様な真珠館があり、かなりの見学者が海女の実演等をめずらしげに眺めていた。真珠養殖が観光施設と共に發展する事はその養殖海面の特異的な条件、即ち地理的条件と共に企画、演出されてこの三津浜の真珠養殖は大掛りな観光施設と相俟つて華やかな幕をあげると言つた感を深くした。

海洋観測委員に願ひ

海洋観測委員会では七月から各地点の観測を実施しているが、事務多忙の爲か結果の未提出が多く集計に困難を極

めている。缺測が多くても遠慮しないで各期毎（上・下）に提出して戴きたい。その際当分の間観測野帳も同封して戴きたい。これは委員会に於いて集計検査に當つて測定方法、換算方法等の間違ひを訂正する爲であるから、写しを一部手元に残された上送附して下さい。又平均値の計算もやつて戴きたい。

御知らせ

海洋観測ステーション以外の会員の皆様の中に、当会使用の観測器具購入希望者がありましたら、左記価格にて一括購入してありますから、実費にて販売の便宜を計つて居ります。郵送致しますと狂ふ危険がありますので研究会事務所にて直接御買求め願います。

一、赤沼式比重計（中央檢定付）各紙筒入

A 二一〇円

B 三二〇円

C 二一〇円

三本入ケース木箱

四六〇円

二、棒狀水温計 110目盛（社内檢定付）

一本 三八〇円

三、シンダー

一個 一六〇円

尚観測委員会にて使用している観測野帳（原簿）（一枚三日分一円）結果整理原簿（集計用紙）（一枚一ヶ月分一円五〇銭）

比重計温度更正図表二五円が少々残っていますので希望者は御申込下さい。

二〇、研究会伊勢部会点描

◎十月に開催される真珠祭打合せの為、七月二十五日漁協二階に於いて、漁協幹部の堀口、西岡、井上、山本、南、松尾各氏と、研究会、堀口、横瀬、山本（文）、山本（一）、佐藤の各運営委員が参加して真珠祭に就て討議された。

研究会も共同で計画実施に当ることになり、目下その企画に当つて居るが、盛り沢山のわりに予算が少く半分位いで出来れば成功と云へるのではなからうか、この際真珠供養塔を作る漁協の案が決定されたが、それも結構、然し「神信心は徳の余り」の古諺もあり、業界の現況を考へ、真珠祭本来の目的から言つても、一部の人の自己満足の為ではなく広く大衆と共にレクリエーションをなすべきであり、P・R運動をば重点的に行ふべきではなからうか。供養される者も皆の信心を望みこそすれ華やかな供養を望んではないと思うし、若し沢山費用があるならば業界発展の一助に使つて欲しいと思はれるであらう。又質素な供養であつてもやり方如何で人々の印象に強く残す事も出来る

のである。

この五十年祭は我々真珠業者皆のお祭りである。この日一日先駆者達の功績を賞讃すると共に明日の英気を養ふ為スポーツに娛樂にレクリエーションを楽しむ様にしてやり度い。

P・R問題は業界全体の問題でもあり、この様なチャンス逃がすことなく大いにやつて欲しいと思ふ。この点、漁協幹部としても、我々としても充分に考へてこの五十年祭を意義あるものと思ふ。

◎三地区連絡会議

三地区連絡会議は七月十日熱海富士屋ホテルに於て行われ、伊勢部会よりは横瀬、堀口、山本（一）の三運営委員が出席、後東京の国際青年商工会議所に真珠祭当日各国青年商工会議所会員の誘致について打合せを行つた。

◎湯河氏を囲んで座談会

第五回研究会終了後午後三時三十分より漁協幹部と国研所長、県水産課平賀技官を交えて研究会常任幹事が懇談会を開いた。席上漁協幹部より研究会に對し、業界の為になると思つたこと、気のついたことは云つてほしい。尚将来漁協に對する意見等も研究会から出してほしいといつたような要望もあり湯河先生からも業界当面の問題を研究して発展をさまたげている原因を探索して積極的にこれを排除して大いに将来の発展に尽す様にとのお話があつた。今後

毎月研究会終了後漁協幹部と研究会幹部との連絡会を持つことに決定、いろいろ話がはずんで午後四時三十分終了した。

◎真珠研究会伊勢部会常任幹事会

第五回研究会の午前議題終了後昼食時間に久し振りに常任幹事会を開き、これからの研究会のもつて行き方について夫々意見が持ち出され、結局基礎研究グループを先ずつくることに大体意見がまとまつたが、これの実行に当つては更に検討されねばならない点もあるが、これは伊勢部会としては海洋観測委員会に次いで第二番目に出来得る分科会であろう。そして除々に数種のグループに分れた研究分科会を作つて行けばよいと思う。結局作つても出来なければ何もならない。出来るものから除々にやればよいと思う。短時間のことで時間もないので午後の会場を座談的のもつて行く為に半円形にする為幹事で整理することに意見が一致、昼食の間にも何かと用に追いまわされている始末であつた。

◎第五回研究会は湯河元農中理事が参観にみえたので一般に固くなつていたようである。

従つて会の運営にも講話が多くなつたことはまぬがれない。しかし布施田地区の田辺・田畑兩氏の交互の施術シリーズ第一回発表は前回の母介仕立に於て新しい方法を発表せられた丈あつて一般からも大いに期待せられていたのであるが、今回も又綿密な研究発表がなされて一同を感心さ

せたのはさすがである。この研究会で取り上げられる基礎的発表が、それがよし将来何らかの形で実用面に現れて来るかは知れないが、結局は将来のことである。然し兩者の研究発表は現実問題として只今必要な実用面の然も苦節数年の研究結果であればその価値も一段と高く評価せられるのは当然である。次回兩君の引続きの発表を会員諸兄と共に期待して止まない次第である。

◎会報第四号に「白珠の原因について」と題する原稿をいたゞき、第五回に之が説明を願うはずであつたが、時間の關係で割愛の止むなきに致つたことについて富士真珠の青木氏に深くお詫び致します。会員の皆様も施術作業に結びつく問題として期待して居られたことゝ思うが次回にお願いすることにして皆様の御了承を得る次第です。

◎真珠祭計畫着々進行

八月七日真珠祭打合せの為佐藤、山本(一)、山本(文)の三委員は和氣伊勢支局長と共に毎日新聞中部本社を訪問、本社森下報導部長、西尾事業課長、上田写真課長に計畫案を説明、種々懇談の上真珠祭に對する積極的な後援を依頼。新聞社としても企画會議を開き積極的に乗り出す旨の回答があつた。

◎専用電話開通について

今度研究会に専用電話が左記の通り開通しました。朝九時より午后四時半頃迄でありますから、それ以後の御連絡は各運営委員宅にお願い致します。

電話 伊勢局 五五三六番

昭和三十三年七月発行

第五号会報

三重県伊勢市岩淵町八四番地ノ二

真珠会館内

発行所 真珠研究会伊勢部会

電話(伊勢局)五五三六番

三重県伊勢市岩淵町一四〇

印刷所 神都印刷株式会社

電話(伊勢局)二二三〇番